

フィルムの上につけてとる。各器は100日以上記録一万回の読取が出来る。3~4ヶ月毎に行つて記録をとりかえ、器のフィルム、電池を交換し、フィルム現像、データを光電スキャンニングでとり出し、電子計算機で処理する。ガルフストリーム強流とハリケーンで流失を除き15が動いている。

7 無人ブイの研究

宇田道隆（東京水産大学）

才9回東太平洋調査会議の決議では、小委員会の報告に基き、次の点に適切な行動を要請した。（本件は日本海洋学の現状から重要）。

- (i) 東太平洋以外の水域にも海洋学、気象学の錨定観測所の必要性を推察し、全水域の推察結果を一つにまとめ、米加が関心をもつ世界全海洋に及ぼし、隣接他国の協力を得ることが望ましい。
- (ii) この分野の主な技術的、科学的問題の解決のため諸研究所、機関、会社等を奨励、援助すると共に、関連情報を他国からできるだけ収集すること。
- (iii) 錨定測器観測所の現在、新設のサービスと保護のためになすべき手段の調査。
- (iv) 予報目的にこのデータを処理し、予報の施設をととのえること。
- (v) 洋上観測所から海岸施設に（サテライト使用の通信も考えて）適切な無線通信チャンネルを推測される情報量に応じ確保すること。

分科会1：無人観測所の必要性、その型式、設置すべき数、場所、

日時。

分科会 2：プラットホーム、繫留、関係測器の大観（測器つり下げ、供給動力等）。

分科会 3：無人観測所からのデータの処理、換算、解析、使用、記録形式、必要施設と幹部

分科会 4：測器細目、受感部、伝達部、記録部、テレメーターリング（大気海洋要素向）。（数十頁の詳しい報告があるが省略）

8 国内新造調査船

宇田道隆（東京水産大学）

(1) 淡青丸（東京大学海洋研究所研究船）

昭和 38 年 3 月 1 日進水（三菱造船下関造船所）250 トン

1 万メートル深海用ウインチ（テーバードワイヤー、末端 3.3 mm）、6000m、中深海用ウインチ（9.1 mm、採泥その他）。1000m トロールウインチ、GEK、ラインホーラー（ナイロンザイル使用）、PDR（13000メートル 測深可能な精密音響測深装置）、人工地震、海上重力計、海上磁力計、地熱測定、浅海底下の地殻構造、スパーカー新設備……三翼可変ピッチプロペラ装着バウスラスタ（微速下船位を容易に変えること容易）船の運転系統に多くオートマチックコントロールとり入れた研究室中央部の机は取外しでき、天井にとどくパネルをとりつけ、自記器その他を固定させる。飼育槽、暗室兼滅菌室、冷房、暖房装置

(2) 高風丸（函館海洋气象台観測船）

夕汐丸の代船として今年 3 月竣工（石川島播磨造船所）総トン数 335 トン、（650HP）全長 4.7 m、航海速力 11 ノット、海況、海霧